大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ドイツにおける石原莞爾（その一）：＜一軍人のヨーロッパ体験＞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006223

ドイツにおける石原莞爾（その一）
――〈一軍人のヨーロッパ体験〉――

伊藤嘉啓

一　ポツダムの下宿

石原莞爾といふ軍人は、満洲事変などとの関りにおいて歴史を画した者として、また一方、強烈な個性のゆゑに、死後、半世紀にもなるのに、いまなほ続々と、石原にふれた本が書かれてゐるが、その中には、長篇の漫画まで含まれてゐる。安彦良和『虹色のトロツキー』（潮出版社）。

それが漫画だからと云つて、別に驚くにはあたらない。漫画は、近年、いちじるしく守備範囲を拡大した。「（マンガは）科学・経済・伝記・歴史・幻想などあらゆる世界に触手を拡げた。どのような世界にも足を踏み入れて、情報に制作者の視覚的想像を付加価値として加え、作品として世間に提供する、つまり、メディアに載せるという力をマンガは発揮しはじめた」（山口昌男、『虹色のトロツキー』第一巻解説）のである。

『虹色のトロツキー』は、まだ完結して居らず、目下製作中であるが、既刊のものを捲つてゐて、石原の人物を評する二つの言葉に出くはした。

その一、「石原は……アカです。」そして、「皇軍の要職をかえりみぬ容共の画策！　斬る！」（『トロツキー』第一巻八八―八九頁）とつゞく。石原は、満洲の建国大学に、トロツキーを教員として招聘しようと云ひだした。それを聞いて、右翼系団体（血盟団）の殺し屋の科白である。大日本帝国陸軍の中枢にゐた者が、容共だと？　石頭の右翼から見れば、トロツキー＝建大講師だけでなく、石原の言動には、さうしたものが感じられぬではない。石原が経済問題の顧問として、モスクワ帰りの宮崎正義を重用したことなども、右翼の癇にさはつたであらう。[1] いや、単なる右翼だけではなかつた。後年、石原が情熱をそゝいだ東亜聯盟でさへ、東条（英機）一派からは、アカと云はれたのである。（高木清寿『東亜の父石原莞爾』、たまいらぼ、一四〇頁）

とにかく、石原は、終始、共産主義に、強い関心を抱いてゐた。ベルリン留学中のこと、ドイツの総選挙が行はれた折、石原は電車の中で、一婦人に向つて、何党を選挙するかと質問した。

「妾ニハドレデモ同ジ。…貴殿ハ何党ガヨイト思ヒマスカ？」ト、小生曰（イハク）「コンムニステン（共産党）ガヨイデセウ」ト。

（大正十三年五月四日）

それが一部の人たちの偏見にせよ、石原は「アカ」と思はれるやうな複雑さを含んでゐたのだ。

その二、「石原さんには、明日（あした）の思想らしきものはあるが、今日の

実践が――ない!!」（『トロツキー』第四巻十二頁）

あるのは、「明日の思想」ではなく、「思想らしき」アヤフヤなものにすぎず、「今日の実践」がないことだけは確実で、強調の記号（！）が二つもついてゐる。

石原は天才的な閃きで遠くばかり見てゐて、足許が暗かつたから、失脚して、早々に予備役に追ひやられて了つた。石原はどこまでも軍人であつて、政治家ではない。

さて、石原のドイツの生活は、その後どうなつたか。

大正十二年四月九日、ポツダムに引越。ポツダムは、ベルリンの西三〇キロ、汽車で約一時間（現在はS・バーンで三十分）の所にある。当時の人口は、五万ほどであつた。日本では、ポツダム宣言で有名となつたが、フリードリヒ大王の離宮サンスーシイ（Sanssouci）は、こゝにある。

普通の家庭に下宿するとなれば、それまでのホテル住まひとは比べものにならないほど、ドイツ人との接触は、より密にならざるを得ない。そして、石原もまた、それを望んでゐた節（ふし）がある。「私ハ独乙ニ於テハ成ルベク独乙人ノ如ク生活シタキ考ナリ」（四月十一日）と云つてゐる。

ドイツは、いまでも「田舎者」のところがあり、よくいへば「親切」、わるくいへば、「御節介」であるが、その頃のポツダムは、更にさうだつたらしい。石原が下宿した先の老婆は、いかにもドイツのお婆さんといふ感じを与へる。

この老婆、年は「六十余リ」で、「上品ナル」未亡人。この人の娘の大尉未亡人が、日本人にドイツ語を教へてゐたのが縁で、石原はこの下宿を見つけたのである。家主は子どもたちとは同居せず独りで暮してをり、女中を雇ひ、石原のほかに、もう一人、ドイツ人男性にも部屋を貸してゐるが、このドイツ人は、家主とはほとんど交渉がない。

石原は、この家庭にどつぷり浸つて了つたやうな所がある。それは、同宿のドイツ人が外食だつたのに対し、石原は賄ひつきを希望したことゝ、下宿の婆さんから見れば、遅れてゐる東洋の島国の士官に、礼儀作法も教へてやらうといふ文字通りの「老婆心」からであつたと思はれるが、石原もそれを喜んで受け入れたのである。

この家主・ディトフルト夫人、警察への滞在申告にも同行、それもどうしてか、一日では用事がすまず、翌日も出頭してゐるが、二日ともついて来てくれてゐる。その他、このドイツ婦人の「親切」ぶりを示せば、

婆サン曰（イハク）「最愛ノ夫人ヘ、Hotelヨリ親切ナル家庭ニ入リシニヨリ安心シナサイト速（スミヤカ）ニ申送ラルベシ。」（四月九日）

老婆君小生ヲ孫位ニ考ヘテ居ルト見エ、色々御世話ヲヤクニハ面倒デ閉口、食事中ノ注意ヤラ途中、人ニ遇ヒタル時ノ敬式、婦人ト同行スル時ノ心得等、而モ小生ハ独乙語不十分ノ為、彼女ノ話ヲ十分理解シ得ザル場合モ面倒ニッキ「ヤー」（然（シカリ）！）ト答ヘテ置クト、其後同事件ニ遭遇セン場合、少シモ改マリ居ラザル為、先生不満ラシキ態度ヲスルモ面白シ。（四月十日）

志賀直哉は、他人の小説をほめるとき、「目に見えるやうだ」と云つたさうだが、こゝのところなど、日本の若いエリート士官が、白髪

のドイツのお婆さんに、紳士の作法をアレコレ教はつてゐる様子が、それこそ、目に見えるやうである。

明治以降、多くの日本人がドイツに留学したが、この人たちは大抵、外食であつた。石原が行つた時にも、「伯林ノ友人等ハ単ニ室ヲ借ルノミニテ食事ハ全ク外ニテナスヲ通例トス」（四月十一日）であつたが、石原は家主と女中と三人で一つ食卓を囲んで食事してゐる。「普通ノ人ハ此ノ如ク、窮屈ナル生活、殊ニ粗食ヲ欲セザルベキモ小生ハ寧ロ此ノ如ク厳粛ナル家庭ノ人トナリ得ルコトヲ喜ブ」（四月十一日）と云つてゐる。

石原はドイツ留学を、特に望んではゐなかつた。これより前にも、ヨーロッパ派遣の話があつたのに、それを断つてゐる。しかし、実際にドイツへ行つた時には、留学を無駄にしてはゐない。出来るだけ、一般のドイツ人の日常生活の中へ入り込んで、ヨーロッパといふものを体験しようとしてゐる。

石原は家主の婆さんとだけ話してゐるのではなく、女中（年三十二、三）ともよくつき合つてゐる。女中の名まへは書いてない。たゞ、その顔が狆に似て愛敬があるとのことから、「ちんくしゃ先生」とか、「ちん君」とか呼ばれてゐる。このちん君、女中なのに手があれるから、洗濯は御免と云つて、家主を憤慨させるかと思ふと、ピアノを上手に弾いて皆を感心させる。「何レ家庭ハ相当ノモノ」（四月十六日）なのに、おちぶれて、かうしてゐるのであらうとのこと。

ある日、家主が石原を公園に案内すると云つてゐたのに、突然の来客で、それが出来なくなつたゝめ、このちんくしゃ先生を代役に推薦して来た。石原は、ひたすら辞退する。なぜ、辞退するのか、その理由は、

家ニアリテハちん君女中トシテ靴磨、掃除等ノ雑役ニ服スルモ一旦外出スル時ハ、一個ノ淑女トシテ大尉殿ハ左側ニ□随シテ行カザルベカラズ、大閉口、早々ニシテ帰ル。（四月十八日）

こゝでも、石原は紳士教育をされ、口では閉口と云ひながらも、結構、楽しんでもゐるやうに見える。

二　近所の子供たち

石原がベルリンに到着したのが、三月十七日、さうして、ポツダムに下宿を見つけ、四月九日には、そこに移り、下宿の家主が、どんな人か、それから、女中には、あだ名までつけて面白をかしく、こちらの様子を知らせてやつた。しかし、これはすべて一方通行で、夫人からの返事は、全くない。つひに、四月十七日には我慢も限界に達し、感情を爆発させてゐる。やうやく、妻からの手紙がとゞいたのは、四月二十日であつた。それに対して、

先ヅ一安心セリ。……鬼ニ角先ヅ先ヅ安心セリ。……鬼ニ角心配シタ。……心配ヲシタ。可ナリノ心配ヲシタ。（四月二十日）

一つの手紙の中に、「心配」と「安心」が、何度も繰返し出て来るが、それが、石原のこの時の気持ちを、よくあらはしてゐるであらう。

次は、いかにも石原らしいエピソード。下宿の婆さんから石原は、なぜ夫人の写真を持つて来なかつたのかと、再三詰問された。西洋人なら、こんな場合、大抵、家族の写真を携帯するからである。それで、石原は写真を送つてくれるやうにと書いてゐる。この時、「大尉殿ノ

父上モ将校カ」ときかれて、石原は、「退役陸軍中将也」と答へた。石原の父、啓介は、軍人ではない。警察官で、埼玉県飯能の署長で定年になつてゐるから、「退役陸軍中将」といふのは、もちろん、石原の例のジョークである。それにしても、なぜ「陸軍大将」といはなかつたのか。後に、石原自身が思ひがけなくも、「中将」で退役せねばならなかつたのを考へ合はせれば、無意識の予感——漢文でいへば、「讖」だつたのだらうか。

かうして、石原は二枚の写真を送らせるのであるが、それへの注文が面白い。

一、親子三人御揃ヒノモノ。父上ハ中将ラシキ態度ヲ取ルコト。
一、鋏子一人ノ写真。

たゞ、これだけではない。もつとも、石原らしいのは、右の引用につゞくコメントである。

鋏子一人ノ写真ハ……出来ル丈美人ラシク（現物モ勿論申分ナキ美人ナルモ、弥ガ上ニモヨクナル様ニ）例の壇上デ写スコト。
（四月十一日）

括弧に入れて補足してゐる個所など、石原の人への——特に、女性への心遣ひのこまやかさを物語つてゐる。

ところが、思ひがけなく、夫人の写真は数日後に送られて来た。そこで、「鋏子ノ写真」を見せてではなく、「拝マシ」てやり、

小生モ西洋式ニ「親切ニテ、利口ニテ、忠実ニテ、美シク、丈高ク教養アリ、殊ニ亭主ヲ熱愛スル尤モスグレタル日本婦人ダ」ト説明ヲツケテヤル。（四月二十一日）

ポツダムは、ベルリンとは違つて、田舎町であるから、こゝでは、日本人がめづらしい。石原を見ると人々はふりむき、子供たちは小声で、「日本人！」と云ふ。鷗外の『独逸日記』にも、類似のことが出てゐる。ある田舎町で、大勢の子供が後をゾロ〳〵ついて来たので、同行のドイツ人大佐が、怒鳴りつけて追払つた。（明治十八年九月六日）

鷗外のドイツ滞在は、石原のそれよりも四十年近く遡るが、石原から約十年後の一九三〇年代にも、同様の報告がある。

郊外や行楽地に行くとよく、「ヤップス（Japs）」の語を耳にした。ヤップスは英語で「ジャップ（Jap）」で、軽蔑的に日本人をさすことばである。ベルリーンで知り合った日本人は、みなこの経験をもつていた。（植田敏郎『森鷗外の〈ドイツ日記〉』、大日本図書、二七〇頁）

石原のまはりの日本人たちも、子供などから、「日本人！」と云はれるのを嫌がつた。

人々ハコレヲ憤慨スルモノ多シ。恰モ日本ノ子供ガ「毛唐」トカ「チャン」ト呼ブト同様ナラント判断スル為メナリ。（四月十日）

ところが、石原は違ふ。

ところが、石原は違ふ。

然シ小生ハ子供ガ満腔ノ敬意ヲ払ヒアルモノト自分勝手ニ定メ毎時笑顔ヲ以テ之ニ応ズ。子供モ喜ンデ敬礼等ヲスルヲ例トス。コノ調子ニテ近所ノ子供ハソロソロ友達トナリカケタリ。

（四月十日）

こゝには、石原のおほらかさがあらはれてゐる。もつとも、この場合は、石原は子供好きであり、それもいくらかは加算されてゐるかもしれない。石原夫妻には子供がなく、あるいは、そのために却つて、余計によその子供を可愛がつたのであつたか。この後、戦死した軍人の遺児を、舟遊びにつれて行つたりもしてゐる。

まづ、この遺児が貨幣を買つてくれ、と云つて訪ねて来た。

小生ニ毎日挨拶スル子供突然訪問シ来ル。聞ケバ此子供ハ砲兵少佐ノ遺児ニシテ目下母ハ病臥中ナリトカ。アルミノ三麻（マルク）ノ貨幣ヲ示シ珍ラシキモノナル故買ツテ呉レトイフ。一枚五百麻（マルク）也、可憐ナル故十枚許リ買ツテヤル。……此有様以テ所謂有識階級ノ窮状ヲ察スルニ足ル。（五月四日）

この十日後には、この子供たちと舟遊びに出掛ける。出発前に、その母親に会つてみれば、大へん感じわるく、腹を立てるが、それでも、子供可愛さのあまり、約束通りつれて行くことにした。三人の子供と一緒に遊覧すること三時間、コーヒーとお菓子をおごつてやると、子供たちは、大喜びであつた。

子供共ノ満足譬フルモノナク、一番末ノ子（十才位？）別レル時ニ曰ク「母サンニ御会ヒニナル時ハ私共ガヨク大尉殿ノ言ヒ付ケヲ守ツテ仲ヨク（其実時々喧嘩シテ泣サレタリ）シタト言ツテ下サイ、サウシナケレバ此次カラ舟遊ビニ行クコトヲ許サレマセンカラトイフ。可愛イモノニアラズヤ。（五月十三日）

こゝでも、括弧内の補足が効いて、表現が生き〳〵としてゐる。

三　愛

石原は、しば〳〵ドイツ（西洋）と日本との「愛」について、または、親子関係について言及してゐる。

話はまづ、夕食の際に、ちん君とのやりとりからはじまる。

「日本ニテハ夫婦ノ愛ハ毛唐ノ如ク凡テノ最上トイフ能ハズ。（西洋式ノ）夫婦ノ愛ハ犬猫スラ之ヲ有ス。父母、国家、人類ニ対スル愛ハ夫婦ノ愛以上更ニ高等ノ感情也」トヤツタ所（勿論マヅイ独乙語デ）婆サン大賛成、自分ノ子供ノ不孝ヲ嘆ジ「大尉殿ハ必ズ両親ノコトヲ先ニシ、妻君ノコトハ其次ニ述ベル（小生実ハ親ヨリ嬶ガ恋シキ不孝者ナルモ）ニハ常ニ感心シテ居ル。西洋人ハ到底駄目ダ。親ヲ愛シ子ヲ愛スル日本人ガ世界ノ最後ノ優勝者タルベシ」ト声ヲハリ上ゲテ弁ジ立ツ。決シテ御世辞ニアラズ。老人ノ考ハ日本ト大差ナキモノト見ユ。（四月二十二日）

夫婦の愛情よりも、父母や人類への愛が、より高等であり、それが

日本にはあると云つておいて、それに対する相手の賛同の意見を引用しながら、括弧に入れて、そつと、「小生実ハ親ヨリ嬶ガ恋シキ不孝者」とさゝやき、妻の感情をくすぐる所は、絶妙である。

西洋では、日本に比べて、夫婦の愛が過剰であり、一方、親や子に対する愛情は、日本よりも薄いと、石原は批判してゐる。親が子供に冷たいとは、これまでも手紙の中で、繰返し書いてあつた。例へば、船中の二月四日には、「西洋人ノ子供虐待ニハ驚ク外ナシ」と云ひ、ベルリンのホテルにゐた時は、「近クノ室ニ夫婦共宿ルアリ、此夫婦七八歳ノ子供ヲ室ニ残シ夜半迄遊ビ廻リ子供ハ大人シク留守ス。何ト驚クベキデハアリマセヌカ？」（四月四日）とある。

しかし、戦後の日本は、幸か不幸か、いちじるしく欧米化し、石原が指摘した「子供ノ虐待」も広まつてゐるが、それよりも際立つて変化があつたのは、成人した子と年老いた親の問題である。

婆サン常ニ娘[2]（大戦未亡人、年四十三才トカ、三人ノ孫アル由）ノ悪口ヲイフ。小生今日話ノ序ニ、七十近キ婆サン一人ニテ働クハ余リニ苦シクアルベシ、娘サント同居シテハ如何ト問ヒシ所、婆サン顔色ヲカヘテ曰ク、「最愛ノ夫ノ死後、若干娘ト同居セシガ、コレ妾ノ一生中尤モ不幸ナル時代ナリキ」ト。驚ク外ナシ。コレガ親身ノ親子也。（四月二十六日）

石原は、かう云つて、西洋を批判するが、それから七十年、日本は確実に、西洋に、より近づいてゐる。環境保護を叫べば、叫ぶほど環境破壊がすゝみ、戦線の不拡大をいへば、いふほど戦線が拡大するのと同じかもしれない。この話題は、なほつゞく。

小生下手ナ独乙語ニテ「耶蘇君ハ愛ヲ教ヘタトカ申ス、人類相愛シ相扶ケテ真ノ平和ヲ築クガ我等ノ目的ニアラズヤ、ソレ親子、兄弟即チ家族間ノ平和スラ保チ難キ欧州人ノ文明ニハ全ク感服ノ外ナシ。（四月二十六日）

「全ク感服ノ外ナシ」とは、何たる皮肉。

我等日本人ト雖（イヘドモ）親子兄弟ノ間、時トシテ争ナキニアラザルモ、相謙（ヘリクダ）リテ親子楽シク同居スルコトヲ、道徳上尤モ大切ナ事ト考フ」云々ト述べ立ツ。ちん君大ニ感心シ頓狂ノ声ヲ出シテ「ああ美シキ日本ヨ！」ト少々内心恥シキコトナキニアラザルモ、誠ニ心地ヨカリシ。

「少々内心恥シキコトナキニアラザルモ」と注釈を入れるなど、神経は、なか〳〵細かい。それにしても、ちん君から賛美された「美シキ日本」は、敗戦と共に消滅した。

石原は、毎日のやうに、日本の自慢をするが、そのためにドイツ人から嫌がられたりはしてゐない。「毛唐ハ自慢ハ正当ノモノト考ヘルモノナルヲ以テ、何等感情ヲ害スル所等ノコトナキガ如」きだからである。一体、日本人は、遠慮といふか、自己卑下が強すぎる傾向がある。石原は、この点、平均的日本人からは、少しずれてゐたのであらうか。あるいは、考へ方が、それだけ西洋的であつたと云へなくもないかもしれない。

ドイツに行つて、日本のために弁じたのは、数が少ないとはいへ、

何も石原だけといふわけではない。森鷗外も、その少数の中の一人。地質学者のナウマン（Edmund Naumann, 1854–1927）、この人は東京大学の外人教師として来日し、十年間日本に滞在、ナウマン象の名称は、この人に由来するのであるが、そのナウマンがドレスデンで話をした折、自分は長く東洋に居つたが、仏教にはなじまなかつた、なぜなら、仏教では、女性には心がないといふからであると云つた。聞いてゐた鷗外は、たゞちに反論した。

夫れ仏とは何ぞや。覚者の義なり。経文中女人成仏の例多し。是れ女人も亦覚者と為るなり。女人既に能く覚者となる。豈心なきことを得んや。貴婦人方よ。余は聊か仏教信者の為に寃を雪ぎ、余が貴婦人方を尊敬することの、決して耶蘇教徒に劣らざるを証せんと欲するのみ。請ふらくは人々よ、余と与に杯を挙げて婦人の美しき心の為に傾けられよと。（『独逸日記』、明治十九年三月六日）

語りをはるや否や、二、三人のドイツ人が、駆けよつて来て、賛同の意を表した。「余の快知る可し」と鷗外は書いてゐる。

その後、鷗外はナウマンと日本について、新聞（Allgemeine Zeitung）で論争までしてゐる。日本は、「此の如き愛国者ある国」（『独逸日記』、明治十九年十二月十七日）だつたのである。

四　紋付

石原は、人を驚かすことも大好きである。日蓮信者である石原にとつて、立正会は大切な日である。この日、石原は、下宿の婆さんとちん君とに、御馳走を約束した。三人揃つて料理屋に出掛け、そこにつくと、石原は着てゐた外套をサッとぬいだ。何と、紋付袴姿だつた。これなぞ、谷崎潤一郎のナホミが、黒いマントにすつぽりと身を包んでゐて、それをぱつとまくると、下には一糸も纏つてゐなかつたのと（『痴人の愛』、十五）、いゝ勝負である。二人のドイツ婦人は、アッと驚き、家主は居合はせた人たちに、「皆様何ト私共ノ大尉殿ノ服ハ立派ヂャゴザイマセンカ」とほめたてたので、さすがの石原も閉口してゐる。

早速、紋付の紋について質問があつた。石原家の家紋は㊂で、「三ツ引ハ智仁勇ヲ示シ丸ハ此三徳ヲ円融具足セルヲ示ス」云々と、石原は流暢なドイツ語ですら〳〵と説明する。

更ニ此衣服ハ全部最愛ノ妻ノ裁縫ナリトイヘバ舌ヲマイテ、其美事ナル紐（羽織ノ）モカト問フ。答ヘテ曰「勿論然リ」、嘆ジテ曰ク「正ニコレ一ノ驚嘆スベキ芸術家也！」（四月二十八日）

こゝでも石原は、この素晴らしい着物が、妻の手縫ひであると云ひ、それを当の本人に報告することを忘れてはゐない。たゞし、「美事ナル紐」まで、石原婦人の手製であつたのか、どうか。これは市販のものだつたのではと疑はれるが、もしも、既製品なのに、手づくりかときかれ、「勿論然リ」と答へたのなら、それはそれで、より一層、面白い。

ドイツ人たちの驚きは、大へんなものであつたが、びつくりしたのは、日本服の美事さばかりでなく、石原の説明の流暢なドイツ語であつた。下宿の婆さんの云ふには、

大尉殿ノ独乙語ノ進歩驚クベシ。（四月二十八日）

実はこれには、裏話がある。石原は、和服――特に、紋については、必ず質問されるだらうとの予測のもとに、前の晩から説明の言葉を考へ、辞書まで引いて準備万端怠りなかつたのである。

この話、さらに、つゞきまでついてゐる。

本日婆サンノ姉婿姪甥等来リ大ニ御馳走アリ。食事中婆サンイイ加減ノコトヲ並ベテ、日本ノ大尉殿ヲホメル（小生不可解ノフリヲシテ居ル。余リクスグツタイカラ）。（五月十日）

さうして、話題が先日の紋付の紋におよび、もう一度、あの説明をして欲しいと頼まれた。石原は困惑。なぜなら、あれは前の晩に辞書を片手に、暗誦しておいたドイツ語だつたから。

モウ一度説明シテ呉レト頼ムニハ閉口セリ。小生説明ノ内容を忘レタレバ。（五月十日）

五　信仰と生活苦

日蓮信者の石原らしい所も、手紙の中には、もちろん、出て来る。航海中は、日蓮関係のものをいろ〳〵読んでゐたし、ホテルでも、下宿でも、御本尊を安置する場所の具合がよいとか、わるいとか、と云つてゐる。しかし、かうしたことよりも、より多く興味を引くのは、石原が宗教や信仰や神について、どう考へてゐたかである。ベルリンのホテルでの女従業員との会話で、女従業員が、神は一片のパンすら与へてくれないと嘆けば、神のために飢ゑ死するは、人類の名誉ではないかと答へてゐたが、

婆サン事ニツケ「神」「キリスト」トヌカスクセニ、朝カラ晩迄生活難ノクドキ話シ許リ、小生「真ニ神ヲ信ズルモノハ、如何ナル生活ノ困難ノ中ニモ常ニ歓喜ニ住シアルベキ筈ナラズヤ」ト突キ込ム。婆サン返事ナシ。（四月二十二日）

信仰の話題は、翌日にまで、もち越す。

婆サン曰ク……「昨晩ノ大尉殿ノ話ハ正当ナリ。（真ノ信仰アルモノハ終ニ貧ヲ訴フベカラズトノ意）然シ中々至難ノ事ナリ」ト。小生答テ曰ク「信ニ入ルハ至難ナリ。然シ一度信ゼバ貧中法悦ノ生活ヲ営ム如キハ自然ニテ、難シトイフハ信ナキ結果ナリ」ト、婆サン目玉ヲ白黒ニシテ沈黙ス。（四月二十三日）

「信仰アルモノハ終ニ貧ヲ訴フベカラズ」は、いかなる貧困・窮乏にあつても、たゞ諾々とそれに耐へるべし、と云つてゐるのではないであらう。もし、さうならば、フォイアバハが批判する如く、宗教は現実容認の具と堕して了ふ。宗教は人々に（石原の場合は、日蓮教徒として、国家、ひいては人類に対して）、未来へのヴィジョンを与へ、現実の活動を促進するものであらねばならぬ。（第一次大戦）敗戦後のドイツの民衆が、信仰を失ひ、たゞ日々の生活苦のみを訴へてゐる現状を、石原は指摘してゐるのである。しかし、一方、石原にも分かつてゐる、ドイツの人々の暮しが、いかに辛いものであるかを。砲兵

少佐の遺児たちに、少しおごってやれば、大へんな喜びやう、「彼等甚シキ貧苦ノ為数年カカル御馳走ニアリツキシコトナキナラン。」（五月十三日）

生活が苦しいのは、何もこの一家だけではない。インフレは日を追つて進んでゐる。下宿の家主の（上の）娘、この戦争未亡人への手当は、いかに少ないか。

むすめハ陸軍少佐ノ未亡人ニテ（大戦間戦死ス）扶助料八十麻（マルク）トカ、戦前ナラバ我四十円計リニ当ル訳ナルモ今ハ日本ノ八厘也。一片ノぱんスラ求ム能ハズ、社会ノ動揺甚シキ無理ナキ次第也。

と、書き、次の言葉で、石原はこの手紙を結ぶ。

恐ルベキハ戦争ナル哉。（四月十六日）

石原は、こゝドイツで、敗戦国の悲惨さを目のあたりにした。しかも、これは独り敗戦国のみならず、戦勝国のフランスにおいてさへも、未だに惨害の跡が各地に残つてゐる。

六　軍事学研究事始め

石原は軍事学研究のために、ドイツに渡つたのであり、この頃になると、それへの具体的な言及も出て来る。

まづ、下宿の家主の紹介で、シュリーフェン元帥の孫を訪ねてゐる（五月一日）。シュリーフェン（Alfred Graf von Schlieffen, 1833-1913）は、一八九一年―一九〇五年、参謀総長を務めた。

一九〇五年、シュリーフェンは、ドイツが将来フランス・ロシア二国と同時に戦ふ場合にそなへて、一つの作戦案を作成した。いはゆるシュリーフェン・プラーンである。それは、ハンニバルのカンネー（Cannae）の会戦を参考にして考へられたものと云はれてゐる。

シュリーフェンの作戦によれば、東は防禦に徹し、攻撃の主力を西にそゝぎ、それも、オランダ・ベルギーを通つて、大きく迂廻し、背後からフランスをたゝくといふのであつた。これは、石原の後の用語にしたがへば、「決戦々争」の典型となる。しかし、実際の大戦勃発時に、もはやシュリーフェンはなく、参謀総長の任にあつたのは、小モルトケ（Helmuth Johann Ludwig von Moltke, 1848-1916. 有名なモルトケの甥）である。モルトケは、シュリーフェンのやうな大胆な作戦をとることは出来なかつた。フランスの背後にまはる大迂廻作戦はとらず、正面からフランスを攻撃、しかも、予想外に早くロシア軍が東プロイセンに到着したのに驚き、西部戦線の兵力の一部を東部戦線に廻はしたが、それは何の役にも立たず、この援軍が東部戦線にたどりつく前に、ドイツ軍はタンネンベルク（Tannenberg）でロシア軍を撃ち破つた。しかし、手薄になつた西部戦線は、マルヌ（Marne）の会戦でドイツ軍の大敗となり、戦線は膠着状態に入る。

石原が訪ねたのは、この有名なシュリーフェンの孫の退役大佐である。この人は、「軍事上無数ノ貴重ナル図書ヲ蔵」し、「自由ニ閲覧スベシトノ好意」を寄せてくれた。

次に、この頃、石原と軍事学との関係を示す記録は、三週間ばかりかけて、ルーデンドルフ将軍の回想録を読んでゐることである。[3] 石原がポツダムに移つてからの「勉強」は、おもにこの読書であつたらしい。ルーデンドルフ（Erich Ludendorff, 1865-1937）は、第一次大

戦の英雄である。東部戦線タンネンベルクで、ドイツ軍に勝利をもたらしたのは、ルーデンドルフとその上官ヒンデンブルク（Paul von Beneckendorff und von Hindenburg, 1847–1934）の功績である。大戦中、参謀総長は三度替り、[4] 三人目として、ヒンデンブルクが就任すると、ルーデンドルフは参謀次長となり（一九一六年八月）、以後、政略、戦略両面の実務は、ルーデンドルフの独裁であつたと云はれる。

第一次大戦に際して、ドイツ参謀部は、シュリーフェン・プラーンを、あへて変更したのではなかつた。シュリーフェン・プラーンは参謀部の確固たる基本方針であつた。

それでは、このプラーンの特質は、何か。これは、もと〳〵決戦々争用の作戦計画なのである。ナポレオン以降、戦争といへば、決戦々争のみが考へられた。誰も、さう思ひ込んで疑はなかつたのである。ところで、石原によれば（『戦争史大観』）、この時点で、もはや時代は替り、持久戦争の時代に入つてゐたのであるが、人々はそのことに気づいてゐなかつた。

しかし、早く大戦前から、戦争には、異なる二つの型があることに気づいてゐた人もゐないではなかつた。ベルリン大学の歴史学教授デルブリュック（Hans Delbrück, 1848–1929）である。デルブリュックは、ドイツ人の崇拝の的となつてゐるフリードリヒ大王の戦争を、（決戦々争の対極にある）持久戦争の代表としたことから、参謀本部との間に論争が持ち上がつたことがあつた。[5] 石原がこの論争について知つたのは、ベルリン滞在中、安田武雄大尉（のち、中将。航空総監）からの教示だつたといふ（「戦争史大観の序説」）。

大戦がはじまつても、「一般の人々は誰もが戦争は短期間で終るものと考へ、特にドイツではクリスマスは伯林でと信じ」（『戦争史大観』、選集3—二一一頁）てゐた。直接、戦争を指導してゐた参謀本部も、決戦々争を行つてゐるつもりでゐた。

石原は、第一次大戦の作戦をつぶさに検証して、この戦争が持久戦争——後年の石原の用語を用ゐれば、消耗戦争であつたとの結論に達した。

実は、ドイツ参謀本部の人たちも、無意識のうちに、これが持久戦争であると感づいてゐたのだ。参謀総長モルトケは、参謀としての経験が浅かつたがゆゑに、むしろ、参謀本部の伝統にとらはれること少なく、それだけ余計に、時勢を感じたゝめ、シュリーフェン計画を不徹底にしか運用出来なかつた。一人モルトケだけではない。ルーデンドルフでさへ、フランスとの決戦々争は、いまや、不可能と思つてゐた。「時の勢と見ねばならぬ。」以上が、石原の見解である。（『戦争史大観』、選集3—二一〇—二二一頁）

石原の有名な「最終戦論」は、ベルリン時代に、その骨子が出来上つたといはれる。それは、第一次大戦の徹底的な検証の上に立つてゐる。シュリーフェンの孫をたづねたり、ルーデンドルフの回想録を読んだりすることから、石原のベルリン時代の「勉強」は始まつた。

七　人種問題

女中のちん君のところに、来客があつた。石原は例の如く、かういふ場合にも、一緒に食事をする。ドイツ人同士の会話は、外国人の石原には、聞きとりにくい。しかし、大体の見当はつく。フランスのルール地方占拠を非難してゐることだけは分つた。「殊ニ黒人ヲ以テ白人ヲ攻ムルコトヲ甚シク非人道ナリト呼ハルコト丈ハ明ナリ。（此事ハ独乙人ノ常ニ口ニスル所也）」こゝまで来て、石原は到底、黙つてゐ

るわけには行かない。

小生有色人種トシテ内心大ニ平ナラズ。機ヲ見テ叫ンデ曰(イハク)「余ハ欧州人タラザリシコトヲ無上ノ幸福トス」トヤツツケル。来客、其理由ヲトフ、答テ曰(イハク)「朝カラ晩マデ戦、戦、毛唐ハ丸デ猛獣ノ如シ、平和ヲ愛シ人類ヲ等シク愛スル我東方民族ノ美シサ今更感嘆ノ外ナシ」一座少々白ケル。（五月十六日）

石原は『マイン・カンプ批判』で、ナチスの民族観を取り上げ、それを批判してゐる。この本は、昭和二十年五月の出版、内容は十九年一月四日から六日までの三日間の石原の講演にもとづいてをり、機関誌「東亜聯盟」に連載されたものである。戦争中に、石原が、民族・人種問題までふくめて、ヒトラーをこゝまで批判してゐる点は、注意しておかねばならぬ。

アーリア人の他人種に対する優越感は、何も、ナチスだけの専売ではない。たゞ、ナチスは、それをスローガンとしたから、目立つのである。今は、皆がにこやかな人道的な仮面の下で、無意識の中に、そつと、それをとぢ込めてゐるに過ぎない。

白色人種の有色人種への偏見は、牢固として不変であるやうに思はれる。石原だけではない。鷗外も書いてゐる。

勝たば黄禍　負けば野蛮
白人ばらの　えせ批判
褒(ほ)むとも誰か　よろこばん
謗(そし)るを誰か　うれふべき……

『うた日記』に収められた「黄禍」と題する、この詩、あの冷静な鷗外にしては、いつになく感情的である。

白人は相手を見下ろしてゐる限りは、大へん親切である。しかし、相手が自分たちと同程度、または、それ以上に強くなると、この人たちは、とたんに、慈善家の仮面をかなぐり捨てる。例へば、日本人は、一つの面しか持つてゐない。それは、あの能面に代表される。ほゝゑんでゐるとも、悲しんでゐるとも、怒つてゐるとも見えるが、そのどれ一つにも徹底しない。日本人には、喜びと悲しみ、善と悪との区別が、より希薄であるやうに思はれる。一方、欧米人はいくつかの面をもつてゐて、その時々で、つけ替へる。人道的な時は、この上なく人道的、悪逆な場合は、地獄の悪魔も顔をそむける。

明治以後、日本の知識人は、自国の罵倒をおもな任務として来たが、中には、もちろん、例外もないではない。鷗外、石原、どちらも、西洋に対する日本の立場を主張してゐるが、鷗外が、「談笑の間能く故国の為に冤を雪ぎ讐を報じた」（『独逸日記』、明治十九年三月六日）のに、石原の方は、「一座少々白ケル」場合が、しば〳〵ある。石原のこのやうな言動は、一部の人々には魅力として映つたが、また、当然ながら反発も招いた。その点から見ても、石原は政治家ではなかつた。政治家は、もつと陰湿でなくてはならぬ。

八　色読

石原が妻に対して、いかに心を遣つてゐたかは、いまゝで見て来たやうに、手紙の端々からも容易に感じとれる。しかし、石原は、自分の妻にだけやさしかつたのではない。鷗外はナウマンの言葉にムッとして、われ〳〵仏教徒も、女性を尊重すること、決してキリスト教徒

に劣らないと云つたが、石原もまた、なか〳〵の「騎士」である。女中ちん君の誕生日に際し、

婆サン曰(イハク)「大尉殿何ヲ誕生祝ヒニ上ゲマスカ」「考ナシ」「私ガヨイ首飾ヲ持テ居ルカラアレヲ上ゲマセウ、鎖（銀）丈ケハ、大尉殿ガ贈ツテ下サイ」……「幾何カ」「一万二千麻ヲ下サイ」……

「ヨシ！」婆サン満悦。（五月十七日）

皆でちん君の兄の家で行はれる誕生祝に出席と決定。ところが、出発直前、石原のもとに郵便がとゞき、それが友人の妻の死亡通知であつたゝめに、石原は出掛けるには出掛けたものゝ、沈黙がちで、折角のお祝に水をさす結果になつたのでは、と気遣つてゐる。

思ひがけない死の知らせは、石原には、大へんショックだつたらしい。この夫妻が、自分たちと同じ熱心な日蓮信者であつたことも、より一層、石原の動揺を大きくしたやうである。手紙では、しばらく、この死をめぐる記載がつゞき、そこから、ます〳〵信仰へ邁進する強い決意が語られてゐる。

石原が日蓮宗に入つたのは、国柱会を通してゞある。そも〳〵、日蓮は国家の平安といふものを重視した。大まかに見れば、大乗仏教といはれるものは、いづれの宗派であれ、さうした面をもつてゐる。だから、大乗なのである。それにしても、日蓮は、より一層、それへの傾きが強い。つまり、日蓮は、より政治的である。だからこそ、しばしば弾圧が加へられたのである。鎌倉新仏教の祖師、道元、親鸞、日蓮を比べて見れば、それが分る。とりも直さず、この日蓮の政治的なところが、石原を惹きつけたのであらう。「日蓮聖人の国体観が私を心から満足せしめた」（「戦争史大観の序説」、選集3－一二七頁）と石原は云つてゐる。[6]

国柱会の創始者、田中智学もまた、日蓮信徒として、政治的であつた。国柱会は、一応、日蓮主義の宣伝普及を看板にしてはゐるが、一つの政治結社といへなくもない。当然、田中には、政界進出の意志があつた。[7] 田中は、将来、合掌内閣を作りたいと云つたさうであるが、石原の手紙の中にも、この「合掌内閣」といふ言葉が、何度か登場する。

合掌内閣ノ如キ、実ニ朝飯前ノ事□□時已ニ来レリ、其実顕ハ余リニ自然ナリ。実顕シ得ザルハ一ニ我等信徒ノ薄信ニヨル。

（五月二十五日）

さうして、「奮へ我友！」と同じ信者である妻に呼びかける。

凡夫ハ中々進歩シ難シ。色読ナル哉、色読ナル哉、末法ノ為唯一ノ修行ハ色読也。嗚呼有リ難キ御教ヘナラズヤ。（五月二十五日）

「色読」とは、日蓮宗の術語で、法華経を正しく読みとり、実践修行するといふ意味。この日の手紙は、最近、「教書ニ親シマズ」、申しわけないが、一方、軍事上の研究は、「空前ノ興味ヲ以テ努力シツツ」あると締めくゝられてゐる。

間もなく、石原はベルリンにゐる友だちから誘はれて、ドイツの東部、ドレスデン、ライプツィヒ、イェナへの旅に出る。

注

(1) 宮崎は石川県出身、県の留学生となってモスクワに渡り、そこでロシア革命に遭遇した。「宮崎自身は決してマルクス主義者ではなかったが、にもかかわらず、一貫して純粋な資本主義に疑念を抱き続けた。」(ピーティ『〈日米対決〉と石原莞爾』、たまいらぼ、第六章の註43)

(2) 家主の老婆には、二人の娘と一人の息子がゐる。上の娘は少佐未亡人、年四十三歳、三人の子供がある。下の娘は大尉未亡人、ベルリンに住んで居り、この下宿を石原に紹介した。息子は「田舎ノ大隊長」(五月二十日)といふから、陸軍少佐と思はれる。

(3) 既に三年まへの大正九年の日記に、ルーデンドルフ回想録の第一集を読んだことが書かれてあり、そこには、次のやうな簡単な感想が添へられてゐる。

「協同作戦ノ困難ナル状況等、窺フニ足ルモノアリ。概シテ政治家ニハ好感ヲ懐カザルモ同僚以下ニ対シ毫モ悪口セズ。クロパトキン回想録ニ比ベ人格ノ高キヲ偲バシム。」(大正九年一月四日、選集2―二九〇頁)

(4) マルヌでの敗北の責任をとって、モルトケは辞任、ファルケンハイン(Erich von Falkenhayn, 1861-1922)が跡を襲ったが、ファルケンハインも、一六年八月に辞任、ヒンデンブルクの登場となる。

(5) 「過去の偉大な指揮官の中で殲滅戦略家はアレキサンダー、シーザー、ナポレオンであった。同じようにデルブリュックは消耗戦略において、ペリクレス、ベリサリウス、ワレンシュタイン、グスタフアドルフ、フレデリック大王をその代表者として挙げている。最後の名前(フレデリック)を包含したことは歴史家の中に憤怒の嵐をまき起した。彼に対する非難の声の大部分は参謀本部の戦史家達で、彼等は殲滅戦略のみが唯一の正しい戦略であると確信し、フレデリックはナポレオンの先駆者だったと主張した。」(ゴルドン・クレーグ〈山田積昭訳〉「軍事史家――デルブリュック」)E・M・アール編著(山田積昭ほか訳)『新戦略の創始者――マキャベリーからヒットラーまで』上巻(原書房)、二七一頁。

(6) ピーティは、石原のこの発言をそのまゝ受けとらず、「彼の国体観は日蓮の国体観というよりも田中智学のそれであった」と云ってゐる。(『日米対決と〈石原莞爾〉』、たまいらぼ、五一頁)

(7) 田中智学は、大正十三年四月、衆議院に立候補したが、落選。